

歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス

日本近現代史研究の現場から

石居 人也

(一橋大学)

hitonari.ishii@r.hit-u.ac.jp

歴史学の研究手法 A

- ◆ 史料(歴史資料)発掘型
 - ・史料調査(能動的／受動的)
 - ・史料整理(所蔵家・機関／受入機関・個人)
 - ・目録作成・研究史把握
 - 解題・報告書を執筆
 - ・問題関心に照らして論文執筆
 - ⇒ 史料群の全体像把握・提示が優先
 - ⇒ 調査的側面を重視

歴史学の研究手法 B

- ◆ 課題設定型
 - ・問題関心
 - ・課題と論点の整理(研究文献)
 - ・史料収集(所蔵機関・所蔵家など)
 - ・史料分析(実物・画像・既刊史料集など)
 - ・論文執筆
 - ⇒目的意識が優先
 - ⇒研究(論文作成)的側面を重視

研究環境とオープンアクセス

- ◆ 史料に触れねばはじまらないという「神話」
 - ・一次史料(古文書)への偏重
 - 史料発掘(史料調査)が不可欠
- ◆ 精緻な史料分析にもとづいた研究の生命力
 - ・新史料の発見がなければ容易には覆らず
 - やはり史料発掘が不可欠
 - ⇒二次史料・文献(活字)では不十分
 - という認識のひろまり

研究者の「生態」とオープンアクセス

- ◆ 史料＝モノへの執着
 - ・すべてが「史料」
 - 捨てられない症候群
- ◆ 出版文化への親近感
 - ・紙媒体でなければ読めない
 - 結局はプリントアウト
 - ・早さよりも確実性？ 数よりも確実性？
 - ⇒自らも、モノを残す

手法の変化とオープンアクセス

- ◆ 実証の学から解釈の学へ(の兆し)
 - ・ 言語論的転回と構成主義的歴史学
→ 史実(歴史的事実)の解明から
史実に迫る「史実」の構成へ
 - ・ 史料の厳密な解釈にもとづく歴史像の提示
→ 議論をとおした解釈の妥当性の鍛錬
 - ・ 検証可能性の担保がより重要に
⇒ 典拠・参照情報のソースへのアクセス

環境の変化とオープンアクセス

- ◆ 史料の多様化
 - ・活字媒体・図像など
 - ・史料画像そのもののウェブ公開
- ◆ 調査→公開サイクルの加速
 - ・目録作成に終わりはない？
 - ワーキングペーパーの活用
 - 抱えこまれた史料の「解放」
 - ⇒不断の更新可能性への自覚と対応

おわりに

- ◆ 決して高くはない(と感じられる)ニーズ
 - ・「頑な」な研究手法・環境、「生態」による
 - 「厳密」「厳格」であるという価値
 - ⇒歴史学の強み／弱み
- ◆ 変化の兆しをつかまえる
 - ・インプットなどの場面での活用機会の増加
 - 敷居はさがる傾向
 - ⇒固有のニーズに応じたあり方の模索を